

# 『余地』

～相談業務を楽しむ方法 34～

## <ゴミ屋敷とは・・・>

杉江 太郎

### ～ゴミ屋敷という表現～

ニュースなどで、ゴミ屋敷を見たことがある人はいるのではないだろうか。SNS等でも、ゴミ屋敷と呼ばれる汚く散らかった部屋を、業者が掃除するような動画を見たこともある。職務の中で、いわゆるゴミ屋敷に行ったことは1度や2度ではない。家庭訪問などを業務の中で行っている人には、そうした経験をしたことがあるという人もいることだろう。ただ、一言で「ゴミ屋敷」と表現して他者にその状況が伝わるものなのかは常に疑問に思っている。ゴミ屋敷という表現には、主観的なものを多く含み、人によって、「ゴミ屋敷」の感覚は異なるのではないか。似た感じのゴミ屋敷はあっても、今までに同じゴミ屋敷に行ったことはない。行くたびにその家の新しい発見をすることになる。また、そこで実際に住んでいる人からすれば、自身の家のことを「ゴミ屋敷」と呼ばれていることは心外であろう。今回は、定義とまではいなくても、少しでも色々な「ゴミ屋敷」があるとイメージしてもらえたらと思い書き進めていく。

### ～足の踏み場～

家庭訪問したときに、「足の踏み場がない」という表現をするときがある。この場合、文字の通り、足の踏み場がなかった状況を表しているのではあるが、では実際のところ、何があって足の踏み場がなかったのであろうか。例えば昔行った家では、入った瞬間にペットボトルがゴミ袋に入れられた状態で積まれていた。どうやって家に上がるのだろうかと見ていたら、普通にその山の低い部分をまたいでいた。またいだ先には足一足分程度のスペースがあるのである。まるで雪の中を歩いた足跡のように。そしてその先にはそれぞれゴミ袋が積まれているのだが、なんと不思議なことに、パッと見る限りゴミの分別が為されているのである。さらに生ゴミなどの臭いの強いゴミはなく、積まれているのはペットボトルやプラゴミ等であった。

また別の家は同じく足の踏み場がない玄関先ではあったがその家の玄関には衣類が積まれていた。家主に聞いたところ、なんと洗濯済みの衣類であったようで、洗濯前の衣類は洗濯機に詰め込まれてい

るとのことであった。(おそらく溢れた状態…)他にも単純にゴミやオムツが雑多に置かれ、足の踏み場を作りながら進んでいかなければいけない家もあれば、食器が割れた状態で家主に了解を得て、靴を履いたまま家に上がることもあった。(家主も靴を履いていた)

このように足の踏み場がないといっても、積まれているものは異なり、その家庭ごとにそうなるに至った歴史や文化がある。さらに足の踏み場がないと言っても、そこで人が生活をしている以上、獣道のようなルートがあるはずである。(ないときもある)

### ～カラッとしているか、ジメッとしているか～

次に、ゴミ屋敷と一般的に呼ばれる家に家庭訪問をしていて思うのが、カラッとしているか、ジメッとしているかという2つのパターンに分けられるということである。ある人はその感覚を、ペタッとしているかしていないかと表現していた。まずは、靴を脱いで、床を踏んだときに貼り付く感覚があるかどうかである。湿度の問題なのか、風の取り入れ方の問題なのか、日当たりの問題なのか、とにかくペタッと吸い付くのである。

床に貼り付くタイプの家では、床に落ちている髪の毛等も同様に床に貼り付いているため、自身の移動と共に動くことは少ない。ホコリもホコリとしてではな

く、汚れとして存在している。逆にカラッとしている家では、ホコリや髪の毛が床に貼り付いていないため、自身が移動するときの風になびいて動いてしまう。ホコリがホコリとして存在しているのである。結果、足の裏にホコリや毛が着きやすい気がする。帰りにコンビニにより、靴下を買ったことも1度や2度ではない。ちなみにペタッとした家では、髪の毛だけでなく、何かしらの汚れがついてくる場合が多い。

### ～生き物との共存～

家の衛生面を左右するのは生き物の有無である。特に猫が放し飼いになっていたりすると、いわゆる多頭崩壊のような状態になってしまい、糞尿で臭い、衛生面共に悲惨なことになってしまう。経験上、ゴミ屋敷には、犬よりも猫の方が多い印象である。犬は散歩が必要であるため、散歩の必要のない猫の方が放置しやすく、ゴミ屋敷との親和性が高いのかもしれない。昔、押し入れを開けたら猫の巣になっていたことがある。子猫もいたため、家主に了解を取った上で、猫を飼っている援助職の方に引き取って頂いた。

別の生き物で言えば、コバエやその他の虫の存在は、訪問のモチベーションにも影響する。やはり生ゴミを放置している系の家は当然ながらコバエが多い。生卵を常温で置いていたからか、廊下に置かれていた卵の入ったパックを動かした

ら、刺激臭と共に、細かいコバエたちが大量に飛び立ったこともある。噴煙消毒をしたら、床一面が真っ黒になってしまったことや、ある方からは、カレンダーをめくったら、カレンダーの形に虫がひしめき合っていたと言う話を聞いたこともある。またここにも、その家によって程度があり、どんな生き物がいるかによって、その生活形態、生活の質を推し量ることができるのである。

### ～掃除～

必要に応じて、皆で大掃除をすることもある。そのときは当然家主に了解を得て、職場の同僚や他の職場の方にも声をかけ協力を募る。大掃除をするときには、箒、チリトリ、たわし、スポンジ、各種洗剤、掃除機、ゴム手袋、ゴミ袋、スリッパと、とにかく何でも利用できそうなものを用意してから向かう。水回りの掃除が必要なときは、カッパを着て、キレイに洗った長靴を履くなどする。

過去に、キッチン、洗面所、風呂場の全てに食器が積まれ、全てが詰まっている家があった。キッチンにはヘドロが溜まり、お玉でヘドロをすくって捨てる作業を繰り返した。洗面所の食器も片づけたが、それでも水が流れず、パイプの部分を分解して、詰まっている物を取り除いた。

ゴミも家主に了解を得ながら分別をしていく。不思議なことにお金が出てくる

こともあり、そんなときは家主に声をかける。不用品を集めて、リサイクルショップに持っていったこともある。押し入れの奥に重たい木箱があり、中身を確認すると、南部鉄器の大きな鍋であった。囲炉裏が似合うその鍋は、リサイクルショップに引き取られ、そのお金は家主にと渡っていった。なぜ南部鉄器があるのかと聞いたら、家主の亡き配偶者が昔、騎手をしており、優勝したときにスポンサーが送ってくれたらしい。そのまま使用することなく、数十年経ち、そのまま歴史だけ重ね眠っていた。今も誰かの囲炉裏にあるかもしれない。

そんな風に家に入り込めると、様々なアセスメントに繋がる。子どもの小さな頃の写真が出てきたり、家主の給与明細が出てきたりする。全てが片付けられていないわけではなく、限定的に片付けられている場所があったりもする。その場所がなぜ片付いているのか想像を巡らせる。ある子どもは、自分の勉強スペースだけは、ゴミを掻き分けて確保していた。

数年経って、一緒に掃除をしたという話で盛り上がることもある。掃除をした後には、家主や一緒に掃除をしたメンバーとの仲間意識が芽生えるような気がしている。

### ～お風呂～

そして、掃除をした後には、休みを取ってお風呂に入りに行くこともある。着

替えも準備して仕事に戻る。

### ～同じ家はない～

その中で誰かが住んでいる以上、最低限の生活を行うだけの空間は残されており、その家庭なりの境界が存在しているはずである。繰り返し訪問し、物が積まれた状態の不便さを共有し、一緒に片付けても良いという関係性を醸成することで、さらなるアセスメントの機会を得ることができ、その後の援助に活かすことが出来る。

汚い、不衛生だからと言って敬遠せず、どんな家庭であっても、そのなかでどのような生活が行われているのかに興味を持ち、観察することが必要である。

そんなことを考えると、やはりゴミ屋敷という表現だけでは不十分で、援助職者の表現として無責任である。自身が見たものを少しでも他者にイメージしてもらえるように実態を捉え、表現の方法を吟味しながら記録に残していきたい。